



Title	第三章 デザイン教育史
Author(s)	高安, 啓介
Citation	a+a 美学研究. 2017, 11, p. 101-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90138
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

- *3 「天子識其手、問之、果為書。〔…〕師古曰「手所謂書手迹」班固撰・顔師古注『漢書』卷二十五上「郊祀志」第五上。
 大久保正編『萬葉集玉の小琴』「本居宣長全集・第六卷」筑摩書房、一九七〇年、四八頁。本文中の「てし」に関する一連の読みは、本居宣長の解
 釈に基づく。
- *4 阿蘇瑞枝『万葉集全歌講義』第二卷（二〇〇六年、二九二・六六七―六六八頁）第四卷（二〇〇八年、三二一頁）笠間書院による表記。本書の底本
 は西本願寺本。
- *5 大久保正編、前掲書、四八頁。
- *6 『古今和歌集』日本古典文学大系八、佐伯梅友校注、岩波書店、一九五八年、九四―九五頁。
- *7 『源氏物語』二「総合」、日本古典文学大系一五、山岸徳平校注、岩波書店、一九五九年、一八〇頁。
- *8 以下の原文引用表記は、杉田宗雨譯『夜鶴庭訓抄』（前掲『図説書法論』第九所収、一二四―一六〇頁）による。
- *9 白居易「新樂譜・五弦彈」
- *10 鯉退而過庭、曰、学詩乎、対曰、未也。曰、不学詩無以言也。鯉退而学詩、他日又独立、学礼乎、対曰、未也、不学礼無以立也、鯉退而学礼「論語」李
 氏第十六（金谷治訳注、岩波文庫、一九九九年）三三七―三三八頁。
- *11 『宇津保物語』三「国譲」上・日本古典文学大系一二、河野多麻校注、岩波書店、一九六二年、一〇一―一〇二頁。
- *12 「初には男（手ニ）もあらず、女（手ニ）もあらず、阿女都千曾、その次に男手、放書に書きて、同じ文字を様々にかへて書けり。」（へ）内は校注
 者による。河野校注前掲書、一〇二頁。
- *13 姜夔「統書譜」に「墨濃ければ則ち筆滞り、燥ければ則ち筆枯る」とある。
- *14 以下の原文引用表記は、平勢冬齋譯『才葉抄』（前掲『図説書法論』第九所収、七六―一六頁）による。
- *15 構築的性質の強い楷書においては「結構」といい、行書・草書・仮名などの流動性のある書体においては「結体」ということが多い。欧陽詢『三十六
 法』には、楷書の結構法に関する詳述がある。点画の間の取り方（間架）と組み立て方（結構）を併せて「間架結構」、あるいは白を顕在化させた「分
 間布白」という語がある。ただし、和様の書論には用語としては登場しない。
- *16 孫過庭「書譜」「真以点画為形質、使転為情性。草以点画為情性、使転為形質」。
- *17 以下の原文引用表記は、平勢雨邨譯『入木抄』（前掲『図説書法論』第九所収、一六九―二〇五頁）による。
- *18 そもそも文字の筆勢は何に起因するかという問いをはらんでいる。東晋時代から「意前筆後」（書こうとする意図や構想、イメージが先にあり筆
 は後からついてくる）という見解がある。衛夫人「筆陣図」、王羲之「題衛夫人筆陣図後」を参照。
- *19 加藤尚武「視覚のなかの立体感」『かたち』の哲学』（岩波現代文庫、二〇〇八年）一二七―一二九頁。
- *20

第三章

デザイン教育史

産業の発展を目指す各国においてデザイン教育はますます重視されている。私たちが現実面に直面している課題に因應するのはもちろん大切だが、歴史から多くの教訓を得ることができる。過去のデザイン教育について振り返り、今後のデザイン教育ありかたを考えた。英語のデザインの語の起源を、イタリア語のディセーニョならびにフランス語のデザインにみるなら、デザイン教育の起源をかなり古くにまで遡ることができる。ヨーロッパ中心ではあるが重要な項目を列挙しよう。一六世紀以降イタリアでのディセーニョ教育。一七世紀以降フランスでのデッサン教育。一八三七年イギリスで設立された官立デザイン学校。一九世紀末フランスにおける装飾教育。一九世紀末イギリスにおけるアーツ・アンド・クラフツ教育。一九世紀末からのドイツ語圏での工芸学校の役割。一九一九年に設立されたパウハウスの造形教育とその影響の範囲。一九世紀から二〇世紀までの北欧諸国での造形教育。一九世紀から二〇世紀までの東欧諸国での造形教育。アジア諸国における近代デザイン教育の受容現代各国におけるソーシャルデザイン教育など。以上の点どうしを線によって結ぶ作業もまた必要となろう。

近現代のデザイン教育について個々の事例はとくに次の四つの点から比較される。第一の観点は、各専門分野に分かれるまえの基礎デザイン教育の位置づけである。全学生がはじめに学ぶべき基礎デザインとは一体何なのか。本当にそれは必要なのか。基礎デザインはいかに各専門につながるのか。第二の観点は、芸術の位置づけである。二〇世紀の近代デザイン運動をとおしてデザインはそもそも芸術なのかという議論もあり、デザイン教育のなかで自由な芸術活動をどれほど許容するかが問われてきた。第三の観点は、学問の位置づけである。デザイン教育はたんなる芸術教育ではなく学問との結びつきも重視されてきた。けれども、心理学・社会学・情報学・経営学・芸術学など、いかなる学問の成果に学ぶべきなのかは、時代によっても地域によっても学校によっても異なるので、その違い

に注目するならば各特色も見えてくる。第四の観点は、各専門分野の編成である。デザイン教育の変遷をたどるとき一つの学校にどのような名称の専門部門が置かれているかは一番分かりやすい指標となる。

(高安啓介)

参考文献

The Journal of the Asian Conference of Design History and Theory, No.1, 2015.
二〇一五年に大阪大学で開催されたアジアのデザイン史学国際会議の予稿集

共同研究

藤田治彦 科学研究費 基盤研究(A)二〇一五―二〇一九年度
デザイン教育史の国際的比較研究―ディセーニョからメディアテクノロジーの現在まで